

# スポーツイベントを通じた イスラム系在日外国人のスポーツ・ライフの調査研究

—イスラム系在留資格者に対するスポーツ政策の基礎情報の収集—

上代圭子\*

野川春夫\*\* 工藤康宏\*\* 秋吉遼子\*

抄録

昨今はイスラム圏の民族との調和が不可欠な時代であり、スポーツ界にとっても同様である中で、移民や長短期滞在者にとってスポーツは、社会内包（Inclusion）につながるインフォーマルな社会ネット構築に有効なツールであると考えられる。また、2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催され、多くのイスラム圏の人々が来日することが予想される。だが、我が国の中東・イスラムへの理解は乏しく、イスラムとスポーツの関係に着目した調査や研究は少ないことから（齊藤、2014）、日本のイスラム圏におけるスポーツに関する情報は断片的で極めて限られていると言える。また、一般的にイスラムは、イスラム発祥地であるアラブ地域が想像される（宮原、2003）が、池端（2015）によると「イスラム教国機構」には、中東諸国の他、アジア、アフリカなど2015年現在56ヶ国1地域が加盟し、イスラム圏とはイスラム教徒が多い国々全体をさすことから、中東諸国だけでなく、アジア、アフリカなど幅広く考えなくてはならないと考えられる。

ムスリム（イスラム教徒）は、ひとたび国際社会に出ると、食べ物や服装など宗教的な様々な問題が出てくる。そのため、ムスリムの割合が少ない国、ひいては2020年に多くのムスリムのアスリートも来日するであろう我が国におけるムスリムのスポーツ活動、スポーツ・ライフを調査し、資料提供を行うことは意義があると考えられる。そこで本研究では、イスラム系在留外国人のスポーツ・ライフを収集し、スポーツ政策の基礎データを提供することを目的として研究を行うこととした。

重要な結果は、以下の通りである。

イスラム系在留外国人は、①あまりスポーツや運動が活発ではない。②スポーツ・運動活動は、散歩・ウォーキングが多い。実施する際には、同国人と実施している人が多く、日本人と一緒にスポーツをしている割合は半数程度である。③スポーツや運動に関するグループに加入している人は少ない。また、④スポーツや運動を通して同国人とは親しい交流を行うが、日本人を含む他の外国人とはあまり親しい交流を行わない。⑤交友関係は、日本人よりも同国人や他の外国人が多い。⑥スポーツ活動を行う際の要望としては、「服装や慣習など、宗教に関することで困らないようにしてほしい」、「言葉を通じるようにしてほしい」。なお、スポーツや運動に関する情報は、新聞を中心としたマスメディアから得ている。そして、東京2020オリンピック・パラリンピックに関心を持っており、開催時には、ボランティア活動を行いたいと思っている。

だが、以上のことから、スポーツ活動による異文化交流が積極的に行われているとは言えず、文化変容もあまりおこってはいないと思われる。

キーワード：ムスリム， スポーツ・ライフ， 文化変容， 在日外国人

\* 東京国際大学 〒350-1197 埼玉県川越市的場北1-13-1

\*\* 順天堂大学 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1

# A Survey Study of Sports and Exercise among Foreign-Born Muslims in Japan Attending Japanese Sporting Events

—Preliminary Data Collection for Sports Policy in Japan's Muslim Community—

Haruo Nogawa\*\*      Keiko Jodai\*      Yasuhiro Kudo\*\*      Ryoko Akiyoshi\*

## Abstract

In an age of instability for a number of Muslim-majority countries and associated emigration, sports may act as an effective tool for social inclusion and the development of informal social networks among immigrant and foreign national communities. With the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games fast approaching, large numbers of Muslims are expected to visit and stay in Japan. However, very little research into the relationship between sport and Islam has been conducted (Saito, 2014). Thus, the amount of information available regarding sports among Muslim communities in Japan is extremely limited. Also, "Organization of Islamic Cooperation" includes countries in various regions. The Islamic area refers to the whole country where there are many Muslims, so we should include Middle Eastern countries as well as Asian and Africa nations.

Issues regarding religious customs may pose barriers to Muslim participation in international sporting events. For a country like Japan with such a relatively small Muslim population, research on sport and exercise habits for residents of Muslim communities may prove to be a valuable resource in advance of the influx of Muslim guests as well as athletes expected during the 2020 Olympic and Paralympic Games.

This study centers on the results of a survey of foreign-born Muslims in Japan. This study intends in the hopes of providing subsequent sports policy. A number of salient points emerged from the study are as follows:

① The majority of foreign-born Muslims in Japan do not take part in organized sport or exercise activities. ② Most frequent activity among them is walking with the same ethnic stock, while around half of them walk together with Japanese. ③ Only few of them take part in team sports or group exercise activities. ④ Many enjoy close relationship with exercise partners of their own nationality, very few have intimacy with Japanese partners. ⑤ Most of them have had more friends of their own nationality than Japanese or other nationalities. ⑥ When asked to consider for participating in sporting activities in the future, their answers such as "I don't want to feel self-conscious about my clothing or religious customs," and "I want to be able to communicate". They also reported gaining most of their information about sport and exercise through mass media such as newspapers.

From the above, cultural exchange and acculturation through sports involvement among foreign-born Muslims have not materialized significantly.

Key Words : Muslims, Sport life, Acculturation, Foreign-born Muslims

---

\* Tokyo International University 1-13-1 Matoba-Kita, Kawagoe-shi, Saitama 350-1197

\*\* Juntendo University 1-1 Hiraka-gakuendai, Inzai - shi, Chiba 270-1695

## 1. はじめに

移民や長短期滞在者にとってスポーツは社会内包 (Inclusion) につながるインフォーマルな社会ネットワーク構築に有効なツールと考えられている。シリア難民の問題やテロ事件が世界的な社会問題とされる今日は、イスラム圏の民族との結びつきが不可欠となっているが、これはスポーツ界にとっても同様である。だが、このような国際状況において、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されるにも拘わらず、我が国におけるイスラム圏のスポーツ情報は極めて限られているのが現状である。

だが、一般的にイスラームというと、中東や北アフリカといったイスラーム発祥地であるアラブ地域を想像し、ムスリム (イスラム教徒) がこの地域に集中していると思われることが多いが、ムスリムの約60%はアジア、とくに南アジアと東南アジアにいる (宮原、2003)。また池端 (2015) によると、イスラームを旗印に設立された国際機構である「イスラム教国機構」には、中東諸国だけではなく、西アジア、中央アジア、南アジア、東南アジア、北アフリカ、西アフリカ、東アフリカなど56か国1地域が加盟している (2015年現在) とされる。したがって、イスラム圏とはこのようなイスラム教徒が多い国々全体をさすことから、イスラムについて述べる際には、中東諸国だけでなく、アジア、アフリカなど幅広く考えなくてはならないと考えられる。

イスラム教においては、クルアーン (聖典) により、健康な心と体は創造主からの贈り物であり、健康の維持は信者の義務とされ、すなわち、預言者ムハンマドは健康な身体を持つことを重要視し、子どもは親から、読み書き、水泳、弓、乗馬を教わる権利がある (山岸、2002) とされている。したがって、男性のムスリムであればスポーツ活動を妨げられることはない。また、男性スポーツに限ってみると、非イスラム諸国との外交や、国民的人気スポーツでの活動による国威発揚などが、イスラムの言説にとらわれない役割として期待されている (山岸、2002)。

これは、クルアーンのとらえ方や扱い方は異なっている (大川、2007) とされているからではないだろうか。したがって、Graves (1967) が、異なった集団間の接触によって個人は変化を経験する (心理的文化変容: psychological acculturation) としていことから、ムスリムは、イスラム教の教義を順守しつつも、現在住んでいる国や置かれている状況、環境などによって、柔軟に対応していると考えられる。すなわち、スポーツに関する考え方についても、出身国とは異なった考え方を持っているとも考えられるのである。

そもそも、我が国の中東・イスラムへの理解は乏しいとしばしば指摘され、イスラムとスポーツの関係に着目した調査や研究はさらに少ない (齊藤、2014b)。ムスリムが大多数を占めるシリアやヨルダンにおいては、体育等のシステムに焦点を当てた調査研究 (齊藤、1998、2007、2014a)、青少年の体力と運動能力に着目した研究 (齊藤ら、2003)、スポーツ教育指導者養成に関する研究 (齊藤ら、2002)、女性のスポーツ状況に関する研究 (齊藤ら、2001) 等が行われ、また、イラン女子サッカーチームのユニフォーム問題に着目した研究 (山岸、2010) 等もあるが、俯瞰的にムスリムのスポーツ活動の現状に着目した調査研究は皆無に等しいと言える。

アラブ諸国の学校体育に焦点を当て、現地調査を行った齊藤 (2014a) は、ムスリムの割合が大多数を占めるヨルダンやシリアでは、学校体育の目標に、国家的、宗教的色彩を持つ目標が掲げられていることを報告している。例えば、シリアでは「アラブ社会、共同社会」の中で生きるための能力といった目標が掲げられ、また、ヨルダンでは、国家社会に生きるための人格形成という目標が掲げられている。またヨルダンでは同時に「イスラム」という概念も掲げており、国家的原則と宗教的原則の中で「社会関係」や「人間関係」を身につけさせることも目標として掲げている (齊藤、2014a)。

以上のことから、ムスリムの割合が多い国では、ムスリムは学校環境において身体を動かすことができるが、ひとたび国際社会に出ると、イラン女子サッカーチームのユニフォーム問題のように、特に女性において身体のどの部分をどの程度覆うべきかという問題が顕在化する。そのため、ムスリムの割合が少ない国、ひいては2020年に多くのムスリムのアスリートも来日するであろう我が国におけるムスリムのスポーツ活動、スポーツ・ライフを調査し、資料提供を行うことは意義があると考えられる。

## 2. 目的

本研究は、イベントを通して東南アジアを中心とするイスラム系在留外国人のスポーツ・ライフを収集し、スポーツ政策の基礎データの提供を目的とする。

## 3. 方法

### 3. 1. イスラム圏のスポーツ・ライフ、スポーツ政策、スポーツイベントに関する2次資料の収集

下記の機関において、イスラム圏のスポーツ・ライフ、スポーツ政策、スポーツイベントに関する2次資料の収集を行った。

- ① 国内のスポーツ情報機関（笹川スポーツ財団、日本スポーツ振興センター（JSC）、文部科学省スポーツ庁）等
- ② 東京都内を中心としたモスク（東京ジャーミイ、ジャーメ・マスジド・横浜、マスジド大塚、名古屋モスク、福岡マスジド）
- ③ 海外の文献・資料のデータベース

### 3. 2. 質問紙調査作成とパイロットテストの実施

文科省の「体力・スポーツに関する世論調査」やSSFスポーツ・ライフデータなどの質問項目を基に、イスラム圏のスポーツ・ライフおよびスポーツ政策、居住する自治体に要望するスポーツ政策等に関する日本語版の質問紙（ドラフト版）の作成を行った。その後、スポーツ・ライフやイスラム文化に関する有識者（野川春夫順天堂大学特任教授、塩尻和子東京国際大学教授など）に対して、ドラフト版（質問項目と尺度）の妥当性について確認を依頼した。

妥当性が確認された質問紙を2ヶ国語（日本語・英語）にて用意し、東京国際大学の留学生（N=5）を対象としてパイロットテストを実施し（2016年7月～9月）、調査マニュアルを含め質問票（A3サイズ表裏1枚）を完成させた。

パイロットテストの際と、モスク担当者や関連機関の担当者へのヒアリングにおいて、対象者として想定されるイスラム圏の人たちは日本語のレベルがあまり高くないということが判明したことから、東京国際大学の日本語教員に依頼し日本語能力試験4級程度の簡単な文言に修正してもらった。

### 3. 3. スポーツ・ライフ、スポーツ政策の質問紙調査の実施とインフォーマル・インタビューの実施

スポーツイベントへの参加を通して質問紙調査を実施するため、まず、2016年7月より、東京都内および近隣のモスクや外国人会関連施設、大学において、スポーツイベントへの参加の呼びかけを行った。だが、社会情勢を背景として積極的な協力を断られた。

そこで、都内のモスクに2か月間毎週通い、①宗教的・政治的な内容の調査ではないこと、②公共機関からの依頼による調査ではなく、学術目的の調査であり、これ以外の目的には使用しないこと、③個人情報保護は厳守することを説明し、理解を求めることに努めた。また、モスクの担当者からイスラム教についての説明を受けるとともに、礼拝の見学も行い、信頼関係の構築に努めた。

2か月間の交渉の末、モスクでの調査の許可を得て、調査を行った。調査の際には、礼拝の前後に調

査の意図を説明し許可を得たムスリムに対し、質問紙と筆記用具を配布し調査員が回収を行った（直接配布・回収法）ものが1ヶ所であり、担当者に質問紙を郵送し、その後郵送により返却してもらった（郵送法）ものが4ヶ所（1ヶ所はハラルレストラン）であった。有効回答数は231票である。なお、調査期間は2016年11月から2017年2月である。

また、モスクにおいて、参加者の年齢・性別・国別などを踏まえ、調査対象者に対し、日本におけるスポーツ政策の問題点・希望する点などについて直接インフォーマル・インタビューを実施した。

### 3. 4. データ分析

収集した質問紙のデータは、SPSSを用いて分析を行った。なお、本研究はイスラム系外国人を対象としていることから、無回答も分析の対象とした。

### 4. 結果及び考察

#### 4. 1. サンプルの属性

本研究の属性は、表1に示した通りである。

		%	(n)
性別	男性	60.2 %	(139)
	女性	34.6 %	(80)
	無回答	5.2 %	(12)
	合計	100.0 %	(231)
出身地	日本	20.3 %	(47)
	中央アジア	4.3 %	(10)
	東アジア	2.6 %	(6)
	南アジア	15.2 %	(35)
	東南アジア	31.6 %	(73)
	西アジア	3.5 %	(8)
	ヨーロッパ	2.2 %	(5)
	アフリカ	14.3 %	(33)
	その他	0.9 %	(2)
無回答	5.2 %	(12)	
合計	100.0 %	(231)	
婚姻	既婚	43.7 %	(101)
	未婚	46.3 %	(107)
	その他	1.3 %	(3)
	無回答	8.7 %	(20)
合計	100.0 %	(231)	
来日理由	労働	14.3 %	(33)
	公務	3.0 %	(7)
	旅行	3.9 %	(9)
	留学	41.1 %	(95)
	その他	17.7 %	(41)
	無回答	19.9 %	(46)
合計	100.0 %	(231)	

性別は、男性60.2%であり、女性が34.6%、無回答が5.2%である。

出身地は、東南アジアが31.6%と最も多く、次いで日本20.3%、南アジア15.2%、アフリカ14.3%となっており、アジア出身の者が多かった。なお本調査の地域の分類は、外務省に準じている。

また、婚姻状況については、既婚者が43.7%であり、未婚者が46.3%、その他が1.3%、無回答が8.7%であったことから、既婚者と未婚者が約半数ずつであった。

そして来日理由は、留学が41.1%と最も多く、労働14.3%、公務3.0%と、働くことが目的であった

者は17.3%であったことから、働くことを目的として来日した者よりも勉強することを目的として来日した者の方が多い。なお、その他(17.7%)の理由としては、家族に同行したというものが多かった。

#### 4. 2. スポーツ・運動実施頻度

スポーツ・運動実施頻度は、週に1~2日スポーツや運動をすると回答した者が28.1%と最も多く、次いで、月に1~3日が19.9%であった(図1)。逆に、していないと回答した者が12.1%いたことから、1割以上の者がスポーツや運動を行っていないことが明らかとなった。なお、インタビューにおいて、「毎日、1日に5回お祈りの時間があり、このときは立ったり座ったりを繰り返すことから、これがエクササイズになっている」と回答した者が数人いた。

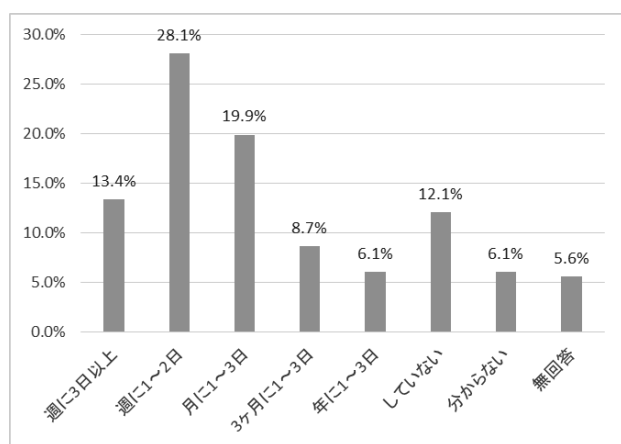


図1. スポーツ・運動の実施頻度

#### 4. 3. 1年間に実施したスポーツ・運動

この1年間によく行ったスポーツや運動を複数回答で質問した結果、最も多かったものが散歩・ウォーキング(44.6%)であり、次いでサッカー(28.6%)、ジョギング・ランニング(26.0%)であった(図2)。

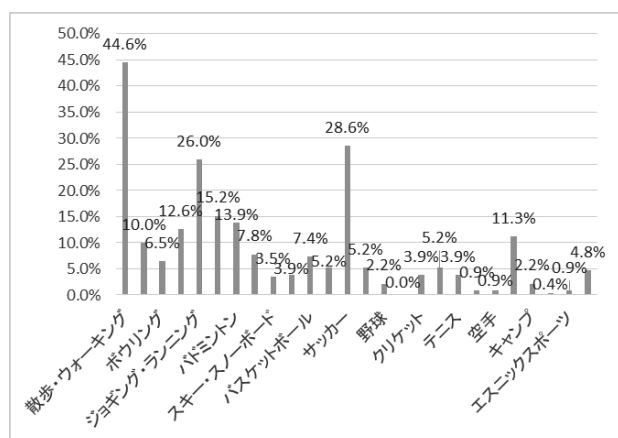


図2. 1年間によく実施したスポーツ・運動

エスニックスポーツについては0.9%であり、また武道についても、柔道、空手ともに0.9%であったことから、自国のスポーツも日本古来のスポーツも行っている者が少数しかいなかった。

#### 4. 4. スポーツや運動の実施時の状況

スポーツや運動を行う際に誰と一緒にいることが多いかを複数回答で聞いた結果、同国人と一緒に(40.7%)か、単独で行う(38.1%)ことが多かった(表2)。日本人と一緒にいる人は29.0%であった。

また、クラブやサークル、チームなどへの加入状況については、44.2%と約半数の者が加入していなかった。また、過去に加入していたが今は加入していない者が19.5%であり、現在加入してスポーツや運動を行っている者は16.9%であったことから、多くは、スポーツや運動に関するグループに加入してスポーツを行っていないことが明らかになった。

表2. スポーツ実施時の状況

		%	(n)
一緒にスポーツや運動をする人	同じ国の人	40.7%	(94)
	日本人	29.0%	(67)
	日本人以外の他の国の人	13.4%	(31)
	ひとり	38.1%	(88)
加入状況	その他	7.4%	(17)
	加入中	16.9%	(39)
	加入中(スポーツ実施なし)	10.4%	(24)
	加入経験あり	19.5%	(45)
	加入経験なし	44.2%	(102)
	無回答	9.1%	(21)
合計		100.0%	(231)

また加入しているグループについて、主なメンバーが同国人であると回答した者が38.1%と最も多く、次いで、近くに住んでいる日本人(12.7%)となっていたことから、同国人とスポーツや運動を行っている人が多いようである(表3)。そして、グループ内の日本人の割合を聞いたところ、ほとんどが日本人であると回答した者が33.3%、半分くらいが12.7%であった。逆に、日本人はあまりいないと回答した者は27.0%、全くいないと回答した者が22.2%であったことから、日本人と一緒にスポーツをしている割合は半数程度であると考えられる。

表3. グループの状況

		%	(n)
主なメンバー	同じ国の人	38.1%	(24)
	近所の日本人	12.7%	(8)
	仕事関係	3.2%	(2)
	スポーツクラブジム	7.9%	(5)
	学校のOBOG	4.8%	(3)
	モスクの人	9.5%	(6)
	その他	7.9%	(5)
合計		100.0%	(63)
日本人の割合	ほとんど	33.3%	(21)
	半分くらい	12.7%	(8)
	あまりいない	27.0%	(17)
	いない	22.2%	(14)
合計		100.0%	(63)

#### 4. 5. 来日後の友人の人数

日本に来てからできたよく付き合っている友人の人数を①同国人、②日本人、③同国人・日本人以外の人に分けて質問したところ、①同国人は10人以上と回答した者が最多(38.1%)、次いで5~9人(14.3%)であった(図3)。②日本人については、1~4人が最多(19.9%)、次いで10人以上(18.2%)であり、③同国人・日本人以外の方は、10人以上が最多(25.1%)、次いで0人(14.3%)であった。したがって、日本人よりも同国人や他国人の方が友人関係になりやすいようである。この点についてインタビュー調査を行ったところ、「モスクで知り合うことが多いから」との意見が多数あった。実際にモスクには日本人は少なかったことから、このような結果になったと考えられる。

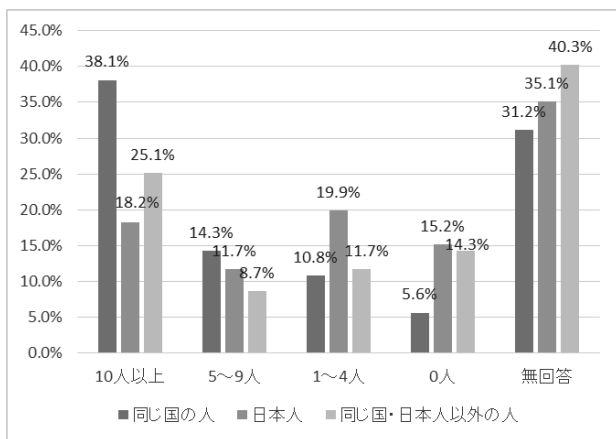


図3. 来日後の友人の人数

#### 4. 6. スポーツを通じた友人関係の構築

次に、①同国人、②日本人、③同国人・日本人以外の人と、スポーツ活動を通して友人になった人数を質問したところ、①同国人とは10人以上友達になったと回答した者が最も多く(29.4%)、次いで1~4人(19.5%)と回答した者が多かった(図4)。②日本人とは、0人が最も多く(27.3%)、次いで1~4人(19.5%)であり、③同国人・日本人以外の人とは0人が最も多く(30.7%)、次いで1~4人(13.0%)と回答していた者が多かった。したがって、スポーツ活動を通しては、同国人たちとは友人関係になりやすいが、日本人や他国人たちとは友人関係になりにくいことが伺える。

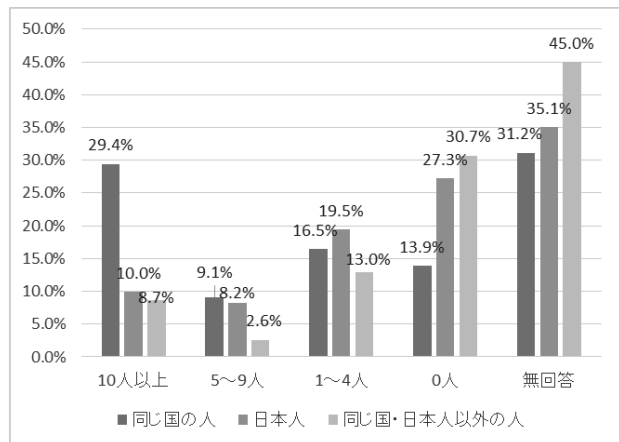


図4. スポーツを通して友人になった人数

#### 4. 7. 友人との交流の程度

①同国人、②日本人、③同国人・日本人以外の人との交流の程度を聞いたところ、無回答が多かった(図5)。中でも、①同国人については、たまに家に呼ぶ(15.2%)が最も多く、次いでよく家に呼ぶ、たまに家に行く(12.6%)と回答していたことから、交流があるようである。次に②日本人との交流について聞いたところ、家に行ったことはない(23.4%)が最も多く、次いで、家に呼んだことはない(12.1%)となっていたことから、親密な交流はないと推測される。最後に、③同国人・日本人以外の人との交流については、家によんだことはない(23.4%)が最も多く、次いでたまに家に呼ぶ(10.4%)となっていた。したがって、同国の友人とは親しい交流があるが、日本人を含む外国人とはあまり親しい交流を行わないようである。

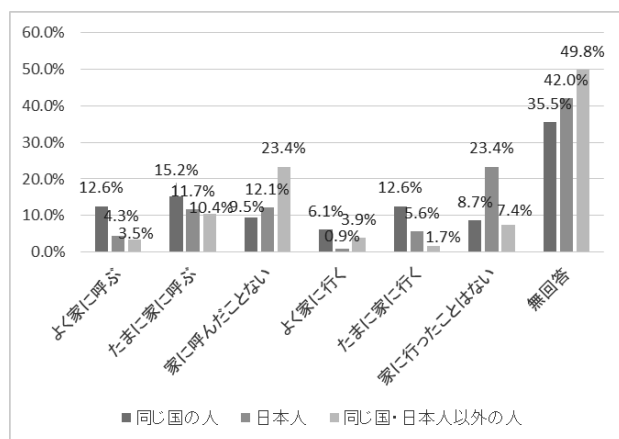


図5. 友人との交流の程度

#### 4. 8. スポーツを実施する際の困難なこと

この1年間に、スポーツや運動をする際に困ったことがあったかどうかを複数回答可にて質問した

結果、時間がないことについては42.9%の者が困ったこととして回答していた(図6)。次いで多かったことは、体力がない・病気である(15.6%)、言葉(日本語)が分からない(15.6%)ことであった。したがって、環境面よりも「時間がない」「体力がない・病気である」といった個人自身の理由が多いことが明らかとなった。なお、何も困っていないと回答した者も14.3%いた。

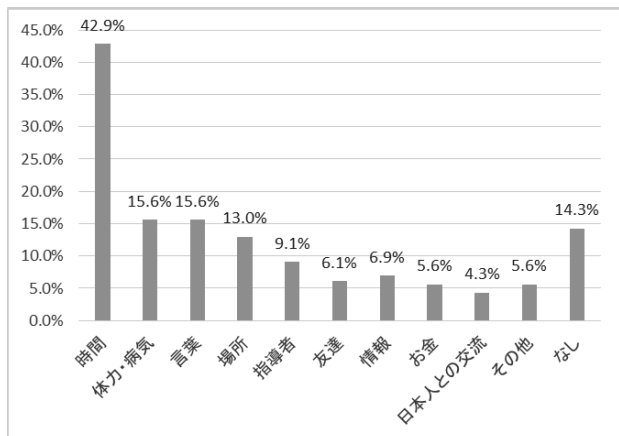


図6. スポーツをする際に困ったこと

#### 4. 9. スポーツ活動における要望

スポーツ活動を行う際にして欲しいことはあるかという質問を行った結果、宗教に関することで困らないようにして欲しいというものが最も多かった(33.3%)(図7)。この点についてインタビュー調査を行ったところ、女性の活動に関することが多く、宗派によっては男女が一緒にスポーツ活動を行うことができないため、「女性専用の施設があればスポーツをできるのに」というものもあった。イスラム圏では、女性専用の施設において男性の目を避けて運動することがノーマルであるため、海外に暮らしていても衆人環視の中での運動・スポーツ活動には抵抗感があると思われる。

また、自分自身のことではなく、「体育のときに規定の体操服ではなく、長袖・長ズボンを認めて欲しい」「プールの授業の際の水着を自由にして欲しい」といった子どもの体育の授業に関するものが多くあった。この点も、自国での習慣が強く影響していると考えられる。さらに、ハラールフードに関しては、「イスラム教国の料理を出して欲しいわけではなく、せっかく日本に来ているのだから、日本料理をハラールにして欲しい」という意見もあった。

スポーツ活動以外で多かった要望は、言葉を通じるようにして欲しいというものであり(27.7%)、多言語での説明を求めている。そして、親切にして欲しいという要望も多かった(20.3%)。

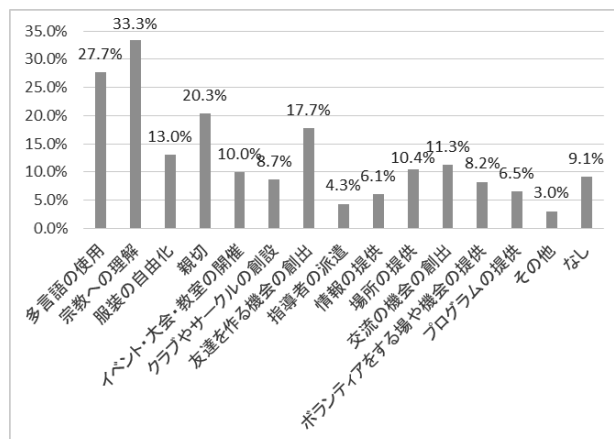


図7. スポーツ活動における要望

#### 4. 10. スポーツや運動に関する情報を得る手段

スポーツや運動に関する情報を得る手段を複数回答可として聞いた結果、新聞が60.6%と圧倒的に多かった(図8)。次いで、日本人の友人・知人(26.4%)、テレビ(22.9%)、ラジオ(21.6%)となっていたことから、マスメディアから情報を得ていると考えられる。

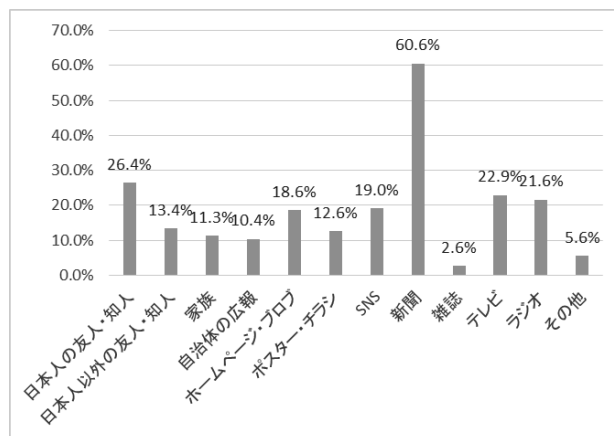


図8. スポーツや運動に関する情報を得る手段

#### 4. 11. 東京2020オリンピック・パラリンピックへの関心

東京2020オリンピックとパラリンピックに興味があるかについて質問をした結果、オリンピックについては「すごく関心がある」と回答した者が最も多く(38.1%)、「関心がある」と回答したのも24.7%、「少し関心がある」と回答した者も10.4%であった(図9)。

また、パラリンピックについては、「関心がある」と回答した者が最も多く31.2%であり、次いで「すごく関心がある」22.9%、「少し関心がある」13.4%であったことから、2020年に東京で開催されるオ

オリンピック・パラリンピックには、オリンピックの方が関心は強いが、オリンピック・パラリンピック両方ともに関心を持っているようである。

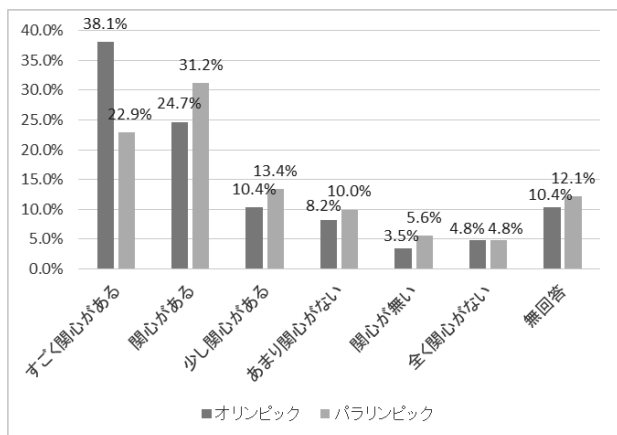


図9. 東京2020オリンピック・パラリンピックへの関心

#### 4. 1.2. 東京2020オリンピック・パラリンピック時のボランティア活動の希望

東京2020オリンピック・パラリンピックにおいてボランティア活動を行いたいかどうかを聞いたところ、「できたらしたい」と回答した者が26.0%と最も多く、次いで「ぜひしたい」が18.6%、「したい」が7.8%であったことから、ボランティアを行いたいという希望を持っていると考えられる(図10)。

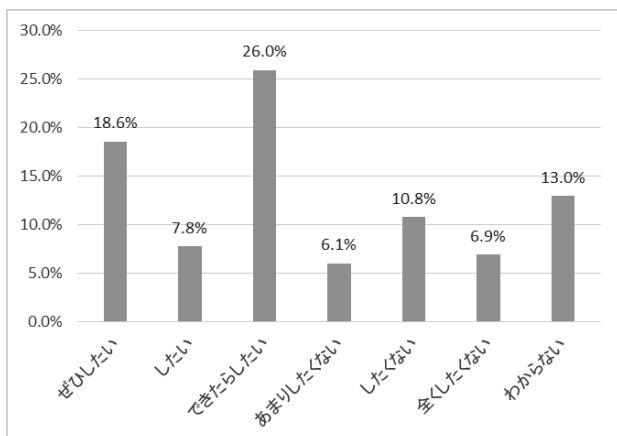


図10. 東京2020オリンピック・パラリンピック時のボランティア活動の希望

#### 5. まとめ

本研究の目的は、イベントを通して東南アジアを中心とするイスラム系在留外国人のスポーツ・ライフに関する情報を収集し、スポーツ政策の基礎データを提供することであった。

結果として、以下の点が明らかになった。

- イスラム系在留外国人はあまりスポーツや運

動を行わない。

- 実施種目は、散歩・ウォーキングが多い。
- スポーツや運動に関するグループに加入している人は少ない。
- 同国人とスポーツや運動を行っている人が多く、日本人と一緒にスポーツをしている割合は半数程度である。
- 友人は、日本人よりも、同国人や他国人が多い。
- スポーツや運動を通して同国の友人とは親しい交流を行うが、日本人を含む外国人とはあまり親しい交流を行わない。
- スポーツ活動を行う際には、宗教に関することで困らないようにして欲しいと考えている。
- 活動を行う際には、言葉を通じるようにして欲しいと考えている。
- スポーツや運動に関する情報は、マスメディアから得ている。
- 東京2020オリンピック・パラリンピックに関心を持っている。
- 東京2020オリンピック・パラリンピックにおいてボランティアを行いたいと思っている。

したがって、スポーツ活動による異文化交流が積極的に行われているとは言えず、文化変容もあまり行っていないと考える。だが、このような状況は、イスラム系在留外国人が参加できるようなスポーツ活動に関する情報、特に言語的な問題に関連する情報不足が影響を与えていると考えられる。

#### 参考文献

- 池端露子 (2015) OIC (イスラーム協力機構) における連帯：OIC 加盟国マレーシアに着目して. 京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センター学生レポート臨地教育研修部門.
- 宮原辰夫 (2003) アジア・イスラーム圏の民主化と地域紛争：アジアにおけるイスラームと政治の問題. 湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要, 7: 25-31.
- 多和田裕司 (2015) マレーシアのムスリム女性に見るイスラーム的装い：消費社会におけるイスラームについての一考察. 人文研究, 66: 195-210.
- 齊藤一彦 (2007) アラブ諸国における身体教育システムの特質に関する研究—シリア・ヨルダンにおける身体教育の社会的・教育的位置付け—. 日本教科教育学会誌, 30 (3): 11-20.
- 齊藤一彦 (2014a) アラブ諸国の学校体育の特色と社会的背景. 体育科教育, 62 (9): 26-29.



- 齊藤一彦 (2014b) 中東地域におけるスポーツの実情と国際協力. 現代スポーツ評論, 31:94-101.
- 齊藤一彦 (1998) シリアにおけるスポーツ教育の現状と課題. 教育学研究紀要, 44 (1) :421-426.
- 齊藤一彦・久木留毅・田村進 (2001) アラブ諸国における女性スポーツ状況に関する研究—成人女性の身体的特徴及び運動習慣を中心に—. 運動とスポーツの科学, 7 (1) : 57-62.
- 齊藤一彦・久木留毅・田村進 (2002) アラブ諸国におけるスポーツ教育指導者養成に関する研究. 教育学研究紀要, 48 (2) : 282-287.
- 齊藤一彦・久木留毅・田村進 (2003) シリアの青少年の体力・運動能力に関する研究—日本の青少年との比較検討—. 教育学研究紀要 (CD-ROM 版), 49 : 219-224.
- 塩尻和子 (2007) イスラームを学ぼう. 秋山書店.
- 塩尻和子 (2008) イスラームの人間観・世界観. 筑波大学出版会.
- 塩尻和子 (2015) 生きられる宗教と宗教学—イスラーム研究再考—. 東京大学宗教学年報, 第30号 : 71-88.
- 山岸千賀子 (2002) イスラーム主義国家イランにおける女性スポーツの推進. 日本ジェンダー研究, 5 : 15-28.
- 山岸智子 (2010) ≪うなじ≫をめぐる政治的対立—イラン女子サッカーチームのユニフォーム問題について—. スポーツ社会学研究, 18 (2) : 53-66.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。